別記様式第４号

2023 年度 独創的研究助成費 実績報告書

２０２４年　３月２８日

<table>
<tr><td>報　告　者</td><td>学科名</td><td>看護学科</td><td>職 名</td><td>助教</td><td>氏 名</td><td>犬飼智子</td></tr>
<tr><td>研 究 課 題</td><td colspan="6">VR（Virtual reality）を用いた周術期看護に関する臨床判断力の評価</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研 究 組 織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所 属 ・ 職</td><td>専 門 分 野</td><td colspan="2">役　割　分　担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>犬飼智子</td><td>看護学科・助教</td><td>成人看護学</td><td colspan="2">統括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>名越恵美</td><td>看護学科・助教</td><td>成人看護学</td><td colspan="2">スーパーバイズ</td></tr>
<tr><td>研究実績
の概要</td><td colspan="6">【目的】VR 看護教材を使用し、周術期事例への学生の対応を実習前後で比較し、観察や臨床判断の変化を明らかにする。評価ツールとして、VR の利用可能性について検討する。
【方法】対象者：A 大学の看護学科 4 年生 11 名。 調査方法：成人看護学実習Ⅰの実習前後に、㈱コミュニケーションプランニングの「看護教育用 VR 教材」の事例「下部直腸がん患者の低位前方切除術に伴う術直後～術後の観察(後出血・無気肺・イレウス)」を用いてシミュレーション演習を実施した。2 名で実施し，看護師役の学生が HMD(Head Mount Display)を着用し術後の観察を行った。その様子はペアの学生が iPad でミラーリングを行い，チェックリストを用いて評価した。交替で実施後にアセスメント，看護問題の抽出を行い，デブリーフィングを行った。分析は、Excel2016 を用いてチェックリストの各項目は記述統計を行い、実習前後の比較は下位項目で t 検定（有意水準 5%）を行った。自由記載内容は質的分析を実施した。本研究は，岡山県立大学倫理委員会の承認(23-10)を得た。
【結果】1)実習前後に平均点が増加した観察項目は、ドレーン刺入部，ドレーン排液量，性状，走行確認，点滴の滴下数，輸液刺入部等であった。有意差($p<0.05$)がみられた観察項目は点滴の滴下数，輸液刺入部であった。2)臨床判断の特徴は、実習前は【情報の取捨選択ができていない】【記録方法の未熟】等の４カテゴリ、実習後は【知識量の増加によるアセスメントの広がり】【情報の取捨選択ができる】等の３カテゴリが生成された。
【考察】医療処置に関する 2 項目で有意差がみられ、実習経験により術後の医療処置のイメージができ観察の必要性が認識されたと考えられる。臨床判断の変化として 【知識量の増加によるアセスメントの広がり】、【情報の取捨選択ができる】は，知識量の増加に伴い、患者から得た情報を取捨選択して記録ができるようになり、根拠をもってアセスメントが記載できるようになっていた。得た情報を選択して統合でき、患者にとっての問題の判断ができるようになったと考える。VR を用いたシミュレーション演習により、学生のアセスメントの広がりや臨床判断の変化を明らかにすることが可能であった。</td></tr>
<tr><td>成果資料目録</td><td colspan="6"></td></tr>
</table>